

村上謙君を悼む

木田 宏

近所で行き来している同級の玉野井君が、9月3日の夜、「今日は村上君の葬儀と時間が重なったものだから、失礼した」と言いながら、同じく葬儀を済ませた母の悔やみに訪ねて来て、一頻り2人で村上君の思い出話を交わした。彼は、在校中それほどクラスの友人と多くの付き合いを持っている方ではなかったように思う。尤もこちらの方が付き合い下手であったのかもしれない。ともかく、非常にませた感じで、ドイツ語に強く、留年して来たのかと思わせるほどであった。岩国中学から四修で入ってきた男と言われて、未だに不思議な感じがするのである。

当時は、軍事色が校の内外に広がっていたが、彼はいわゆる軟派の方で、体格もさほど頑強そうには見えず、授業もさぼりがちであった。教練や体操には全く不似合いな容貌態度で、喫茶店の音楽やメッチェンの話しになると目が輝き、歯切れの良いドイツ語が飛び出してきた。校長を勤めた立派な教育者の息子であるとは信じ難かったと言うのが、教室で比較的席の近かった松村忠雄君の思い出である。

大学は京都の法学部に進み、十八年に満州高文を取って外務省に入り、十九年に高文行政科の試験に合格している。二度召集を受けながら、軍隊勤務は極めて短く、外務省の勤務が戦中、戦後と続いているのは、やはり彼が期待されていたからであろう。同じ京大に進みながら、文学部に道草を踏んだりした為、彼が外務省に入ったことなど知らないままであった。

終戦を昭南島で迎え、1年後にやっと復員して文部省に職を得たが、役人仲間で初めて出会った級友が彼であった。それも全く予期しない所に座っていた。

今は迎賓館になっている赤坂の離宮に内閣法制局の事務室があったとき、通りすがりに「木田君ではないか」と声を掛けてきたのが彼である。村上が法制局参事官に！軟派で、とても役人などには向かないと思っていた男が、事もあろうに役人の中で最も堅気な法制局参事官とは！「何を担当しているの」と尋ねると、外務省から最近派遣されて条約の審議が中心だという。昭和33、4年のことである。

この時ほど、世の中が変わったんだと思ったことは無かった。また、人間かくも変わり得るものかと驚いてしまった。しかし、学生時代の印象が間違っていたのかもしれない。

今にして思えば、クラスに大濱巖比古君という天才的な文筆家がいた。やや身持ちを崩し、健康を損ねて十年前に他界してしまったが、村上君にも語学その他に天才的なものがあり、組織人には成り難い能力の持ち主と思っていた。しかし、村上君はその後の経歴が示すように、ガーナ、ルーマニア、東独の大使と外交官の道を歩んで、その能力を手堅く発揮している。ルーマニアの大使に出かけるときに、文乙の同級生で壮行会をしたことがある。立居振る舞いなど堂に入ったもので、学生時代の印象とは違う側面を職歴が築き上げた后感心したのである。

その彼も退官して、2年前には東京国際大学教授となり、学生と一緒に海外旅行などをして、新しい生活も良く水に合うようになったと話していた。それを聞いて、これから彼の天才的な側面がいよいよ発揮されるのではないかと思ったことである。東京四木会での卓話も、そのことが告げられただけで、遂に顔を見ることも無く終わった。

やはり、少し早死にであった。しかし、高齢化社会に老醜を曝すよりは、見事な人生であったと慰めることができよう。ご冥福を祈りたい。